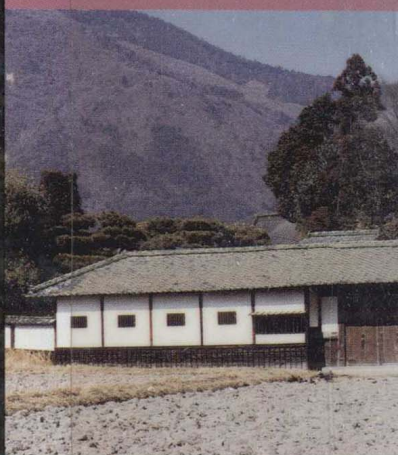


中里介山

『大菩薩峠』

武井昌博著

の旅



有峰書店新社

武井 昌博（たけい まさひろ）

大正6年、山梨市八幡に生まれる。

昭和15年、山梨高等工業学校土木工学科卒業後、鉄道省
工務局に奉職、引きつづき国鉄に勤務。昭和48年退職。

現在保護司

著書 歌集『仰星』 感想集『野の道』

中里介山『大菩薩峠』の旅

定価 1800円

昭和63年2月20日 印刷

昭和63年2月29日 発行

著 者 武 井 昌 博

発行者 岩 渕 久

発行所 有峰書店新社

〒162 東京都新宿区南山伏町6番地

電話／東京267-1521 振替東京 0-82910番

印刷・製本 株式会社興英文化社

ISBN4-87045-175-1 C1026 ¥1800E



春霞む大菩薩峠の遠望 大菩薩峠は御坂山脈が秩父山塊につづくあたり、ちょうど甲府盆地の東端に位置する。尾根にあたる峰が大菩薩嶺であるが、これは「霧の旅会」の登山家松井幹雄氏・武田久吉博士によって名づけられた。全山小仏層よりなり、約六千万年の歴史がある。（写真手前は塩の山と笛吹川）



雪の武田神社（甲府市古府中町）武田館は武田信虎が居館を築き（1519）、以後信玄の治世33年間を経て勝頼が新府城に移るまでの間、武田氏の居館と政庁を兼ねた本拠であった。その中心地は現在の武田神社境内で、高坂弾正、穴山梅雪、馬場信房の屋敷は写真の右手前にあった。この付近をつつじヶ崎と呼ぶ。



勝縁荘（塩山市裂石、大菩薩峠中腹） 塩山市大藤出身の益田勝俊氏（昭和62年1月死去）が、大正の末に小説『大菩薩峠』の名声によって、この峠を訪れる登山者の便をはかって、昭和7年6月に建てた山荘である。この右手奥には益田氏が介山のために山荘三界庵を建てて提供した。介山は石原登美子を伴ってここを訪れ、恐山の巻を執筆している。



中里介山執筆の間「松の間」(白骨温泉旅館；長野県安曇村)。ただし、写真は昭和25年再建築したものである。



白骨温泉旅館
三階右端が机竜之助の
部屋（昭和25年復原）
右手の建物は浴場。



小説大菩薩峠記念碑（峠上）。昭和29年10月23日建立

台石 「上求菩薩下化衆生」

碑面 名作発想の地

中里介山先生作

大菩薩峠記念碑



中里介山の墓（東京都羽村町禪林寺）。戒名「修成院文宗介山居士」

墓は禪林寺の手前で坂を左に登ったところにある。また天明4年（1784）の農民一揆の碑「豊饒の碑」（明治7年）もある。

中里介山『大菩薩峠』の旅

はじめに

中里介山の長編小説『大菩薩峠』は世に出たとき、爆発的人気で多くの読者を魅了した。

作者が精魂込めて、長年月を書きつづけてきた『大菩薩峠』は、作者の死去によって、未完の終末を告げねばならなかったが、今日でもなお多くの読者に読まれている小説のひとつであることには間違いない。

作者が訴えんとした小説の意図は別としても、作中に登場する人物の多いことでも類を見なく、彼等は異色の人物として、それぞれが、主人公としての存在価値を与えられて、小説の筋運びの上で重みをもっている。

読者は自由に、彼等のうちのある人物のファンとして、彼等の行動する舞台に沿って、一緒にいるような感情にかられるに違いない。

その舞台というのは、作者が自ら実際に訪れたところなので、描写はきわめて現実的であって、小説の面白味を増しているひとつの要因ともなっていることは、また読者にとって楽しい。

そこで、私たち読者としては、小説中の舞台を、順ぐりに訪れ、その地にふさわしい一節をくりひろげながら、もう一度小説に思いをめぐらせてみることも、小説『大菩薩峠』の鑑賞のためには、一

つの方法ではないかと思われるのである。

そうはいっても、作者が描写した時点と今日のそれとは、時の移り変りとともに、様子が違ってきており、あるいは、全く変ってしまったているかも知れない。しかし根本的な何かはあるであろうし、時代を逆転させて小説の中の主人公達と相見ることができるようにするのは、読者にとって楽しいことであり、かつ可能はずである。

また、新しい読者となる方にとっても本書による旅をすることによって、小説を読まれる場合一つの楽しみが生まれるのではなからうか。

このような考えから、私達は、机竜之助とでも、お銀様とでも、あるいは肩の張らないようにと、十八文道庵先生とでも一緒になって、旅をつづけてみたいと思うのである。

著者

	はじめに	七
	旅立ちにあたって	七
	甲州街道	一七
1	発端(甲源一刀流の巻)	三〇
2	万年橋()	三六
3	沢井()	六
4	御嶽神社()	三
5	神田妻恋坂()	三
6	京都島原(壬生と島原の巻)	三六
7	大和三輪(三輪神杉の巻)	三九
8	紀伊竜神(竜神の巻)	四三
9	山田(間の山の巻)	四六
10	伊勢()	五〇
11	浜松(東海道の巻)	五七
12	三浜()	六二
13	徳間(白根山の巻)	六四
14	西山湯島()	六九
15	奈良田()	七
16	つづじヶ崎(駒井能登守の巻)	七五
17	一蓮寺()	七六
18	鶴川()	八三
19	有野(伯耆安綱の巻)	八五
20	甲府城下()	八八
21	袖切坂(お銀様の巻)	九六
22	江曾原(慢心和尚の巻)	九九
23	小泉家()	一〇六
24	笛吹川の洪水(黒業白業の巻)	一〇九
25	尼寺(慢心和尚の巻)	一一四
26	恵林寺()	一二七
27	勝沼()	一二〇

45	伝通院（白骨の巻）……………	一七四
44	高尾山（一）（禹門三級の巻）……………	一六六
43	花屋（小名路の巻）……………	一六六
42	六所明神（〃）……………	一六三
41	大中寺（無明の巻）……………	一六〇
40	妙義神社（安房の国の巻）……………	一五七
39	染井（〃）……………	一五三
38	庚申塚（小名路の巻）……………	一五二
37	九十九里浜（Oceanの巻）……………	一四九
36	清澄山（安房の国の巻）……………	一四八
35	平沙浦（安房の国の巻）……………	一四四
34	甚内様（〃）……………	一四二
33	酒折の宮（小名路の巻）……………	一三九
32	長者町（道庵と鯰八の巻）……………	一三五
31	両国橋（〃）……………	一三三
30	弥勒寺橋（〃）……………	一三三
29	本所・両国（安房の国の巻）……………	一三〇
28	扇屋（道庵と鯰八の巻）……………	一二四

63	高山（勿来の巻）……………	一三七
62	花巻（〃）……………	一三四
61	恐山（恐山の巻）……………	一三〇
60	松島（白雲の巻）……………	一三四
59	勿来（勿来の巻）……………	一三二
58	白骨温泉（鈴慕の巻）……………	一二五
57	高尾山（一）（白骨の巻）……………	一二三
56	松本の塩市（他生の巻）……………	一二〇
55	川中島（流転の巻）……………	一一五
54	大菩薩峠（弁信の巻）……………	一一二
53	追分宿（〃）……………	一〇九
52	碓氷峠（流転の巻）……………	一〇五
51	沢井の水車小屋（めいろの巻）……………	一〇三
50	氷川神社（他生の巻）……………	一〇一
49	いのじヶ原（〃）……………	一〇六
48	下諏訪の宿（白骨の巻）……………	一〇五
47	御行の松（流転の巻）……………	一〇三
46	月見寺（無明の巻）……………	一〇一

64	今 須 (不破の関の巻)	二四
65	黒血川 (")	二四
66	和佐見ヶ原 (")	二五
67	伊吹山 (新月の巻)	二五
68	大通寺 (恐山の巻)	二五
69	白水谷 (農奴の巻)	二六
70	福 井 (山科の巻)	二六
71	長 浜 (椰子林の巻)	二七
72	柳緑花紅 (京の夢大阪の夢の巻)	二七

73	醍 醐 (椰子林の巻)	二七
74	三条河原 (山科の巻)	二八
75	月心院 (")	二八
76	岩 倉 (椰子林の巻)	二八
77	洛 北 (")	二九
	その後の人々	二九

あとがき

● 写真撮影

著者

旅立ちにあたって

J R 中央線の立川駅から奥多摩地方に向う青梅線の電車は、市街地を抜けると、やがて多摩川の左岸に身を寄せるようにして走る。

作者中里介山の生地羽村^{はむら}は、時間にして、二十分もかかるか、かからないほどの近距離、武蔵野の片隅に位置している町である。

昭和二、三十年頃は、広い畑の中に、こんもりとした大木の森に囲まれて、大菩薩峠記念館が、本館のほか、耕書堂、道場その他の幾棟かを揃えて立ち並んでいた。

しかし、今次の大戦中の荒廃の上に、年月の移り変りは、さらに建物の管理にも変化があって、現在、すっかり様子が違ってしまった。ぼう大な資料などは、東京駒場の近代文学館にある。

さま変りした旧地には、親族村木氏と宮沢氏によって建てられた記念石碑に、次のように刻まれている。

「ひとの心のおぼつかなければここにいしづみをもって百姓弥之助のとわのかたみとなす」

羽村の町を抜け、多摩川の岸边の方向に進むと、そのはずれ、段丘の端のところに菩提寺の東谷山禅林寺がある。作者介山は一族とともにここに眠っている。寺は鎌倉建長寺の末寺である。

ここから多摩川に沿って奥多摩街道を上流に向うと、名高い玉川上水の取入口が近く、ここも中里家とは無縁のところではなかった。作者出生の地で、いまはわずかにそれを記す標札が教育委員会の名をもって立っているにすぎない。

青梅市街から多摩川を渡って、五日市町に通ずる秋川街道の沿道に昔の調布村、いまは青梅市内になっている上・下両長淵がある。

実は、小説の発端となっている御嶽神社前での奉納武術試合の両立役者のモデルの道場があったところである。

幕末の頃、下長淵には三田左内、上長淵には宇津木栄之丞という同流甲源一刀流の剣士がいた。この二人の対立にからませて起った事件というのは、いまでもこの地に残る話である。

甲源一刀流の流れを汲むいまの埼玉県日高町の比留間道場から、特に三田左内が突出して別派として開平三知流を開いた。その上、左内は自派の隆盛を祈念して武州御嶽神社に奉納額を掲げようとしたことから、師家比留間との間に争いが起ころうとした。

このとき、顔役として松崎和田五郎らが仲に入って事なきを得たといういわくつきの額が、いまでも御嶽神社に保存されているが、このなかに三田・宇津木の名が見える。

しかし、事実は宇津木は三田の高弟なので、小説では竜之助相馬宗芳と姓を変えている。奉納額の件は慶応三年三月であるが、これより前の時点で小説の発端は設定されている。

三田・宇津木共に八王子を中心に組織されたいわゆる千人同心の郷士で、特に三田家はいまも付近では弾正屋敷と呼ばれている。北条戦国の頃、多摩地方に勢力を張っていた三田氏との直接関連は判

然としないともいわれている。

なお、宇津木兵馬が、時には用いる偽名の静馬は、奉納額の中に志津麻があり、片柳姓も御嶽地方には数戸みられる。甲源一刀流宗家三代は逸見兵馬、義豊と名のっている。

青梅の市街地にもどって、青梅駅の少し西の奥まったところ（梅園町・仲町）、そこは青梅線の踏切りを渡ってすぐの市立図書館裏手に「七兵衛地蔵尊」が祀られていて、いつ訪れても花などが供えられている。

小説に登場する七兵衛のモデルになったといわれる実在の同名の人物は、市内裏宿に住んでいた（現在七兵衛公園となっている）。農夫で盗癖があるが、盗品はまずしい者に人知れず与えていたという。しかし悪事の果てに捕えられて首を切られたことが二俣尾ふたまたおの三田氏家臣の家系の谷合文書（見聞録、元文元年）に記されている。

その後、七兵衛が生前に持っていた土地を手に入れた者は、きまって病死か災難に遭ったが、そのうち某寺に寄贈されて、わずかに一カ所残っていたのが、地方事務所の前身郡役所の敷地になった。

ところが、建築中にいろいろな事故が起ったり、開所後も所長、職員の多くが病死、事故を起こしたので、七兵衛地所のたたりだとして、公費をもって地蔵尊に祀って供養したところ（昭和七年）、それ以来、不思議と何事も起らなくなったということである。いまは、地方事務所の敷地は都立青梅図書館となっている。地蔵堂も公署を離れて民間によって維持されている。

地蔵堂前に建つ仲町自治会の説明文によると、「安政年間の頃、青梅村裏宿に住む七兵衛という百姓は義侠心に厚く、常日頃貧者に恵むことを無二の楽しみとしていたとあり、またその健脚は一丈（三

旅立ちにあたって

